白菖阿繁顛末
上之巻
綱島文庫

A492
3

白菖阿鰒系の顛末

三編

上之巻

芳川春濤閣
岡本起泉編
楊洲周延画
綱島板

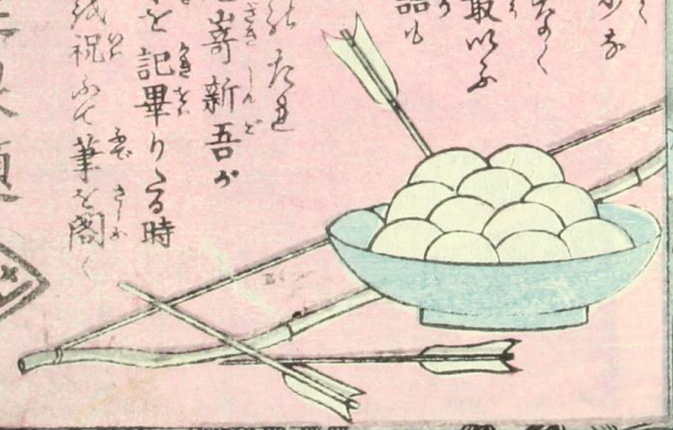
L48-82917

冊子の序文ハ傍訓新聞の官令同様看る人い少ゑあれど無てハ叙てゝ体裁をなさず依て是非なく半丁の餘白を塞ぐんと筆を採て見るもの最も言ゆなれ果ハ尾嵜が池ハ始まりー長物語ゝ

だゝく急業此三編の上ハ示ハ因果應報憾無常中下合ゝく十八丁牛何の仕舞その高輪と品川の間ハ起る凶変ゝ尾嵜新吾が情誼ゝ愛ゝく局を結ぶハ至りー御繋ぎ顛末を記畢りゝる時丁度菖蒲の節會團子射るゝ戚日ゝ當ゝ祝ゝ筆を閣く

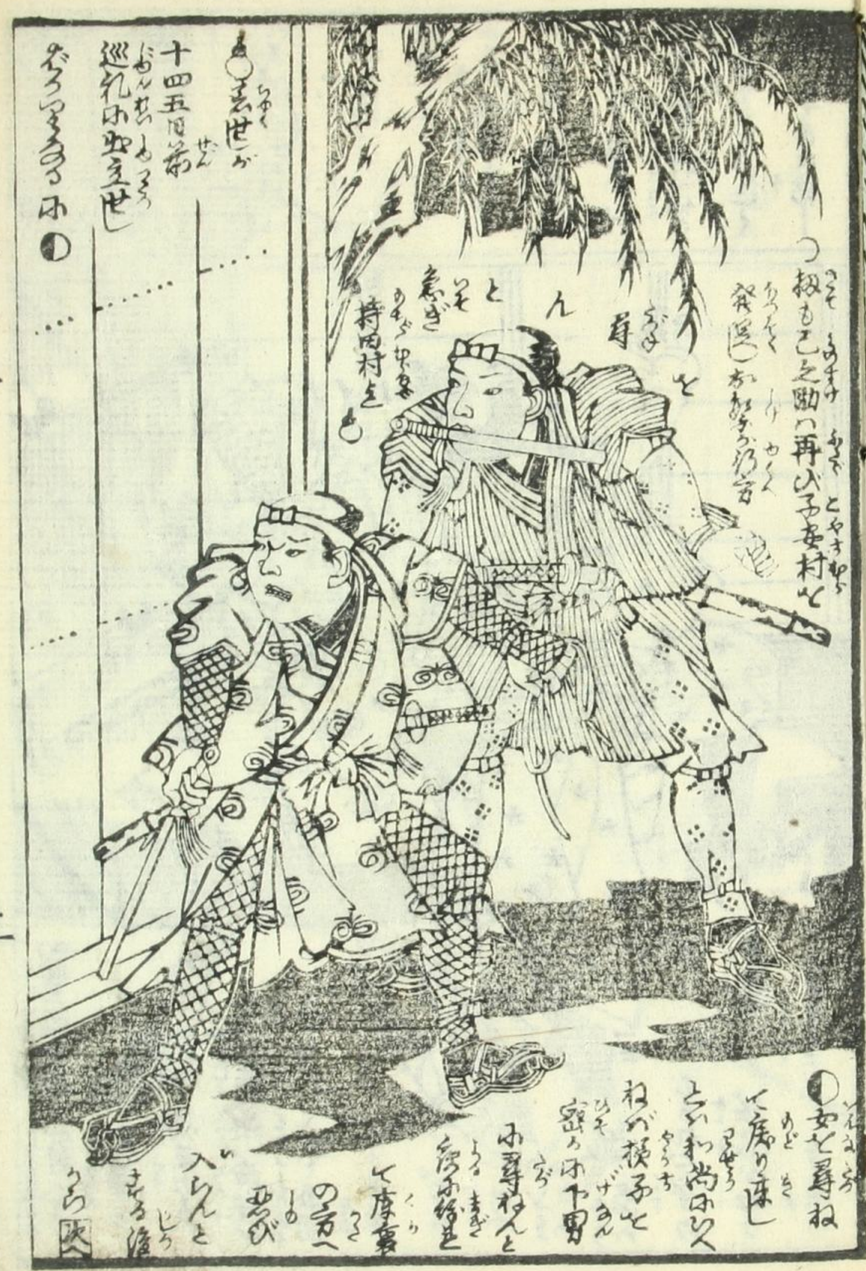
明治十三年五月

岡本起泉題



高輪の番太郎
嘉七
八町堀の同心
尾嵜新吾

品川の遊女
おきの


十四五日前
巡礼ホ出立世
女と尋ね
て廻り来
ると和尚ホ
ねが旅子と
密ホ下男
ホ尋ねん
と
と
ん
と
と
と
持田村と

田中屋
白金の七種賣
巳之助

つゞき
二三人の捕手が十重ふつあげ上意と気絶に乙之助を両て押へ行の用精もあらくしく手とるさまに縛し

組子共り村々へ打集り相抜のうへ奉行所へ検視を受るとして先両個それがしぞとおもふ心あまり寄へおされど寺の探子を知りあの者の

お遠日さまとても其の人

あげ寺の書院へ▲

▲引続きて乙之助の覚き仔細と見ゆるが夜前阿弥陀寺へ盗賊が忍び入空禅和尚を切害して有ある金銭衣類を奪ひ去りしとぞ

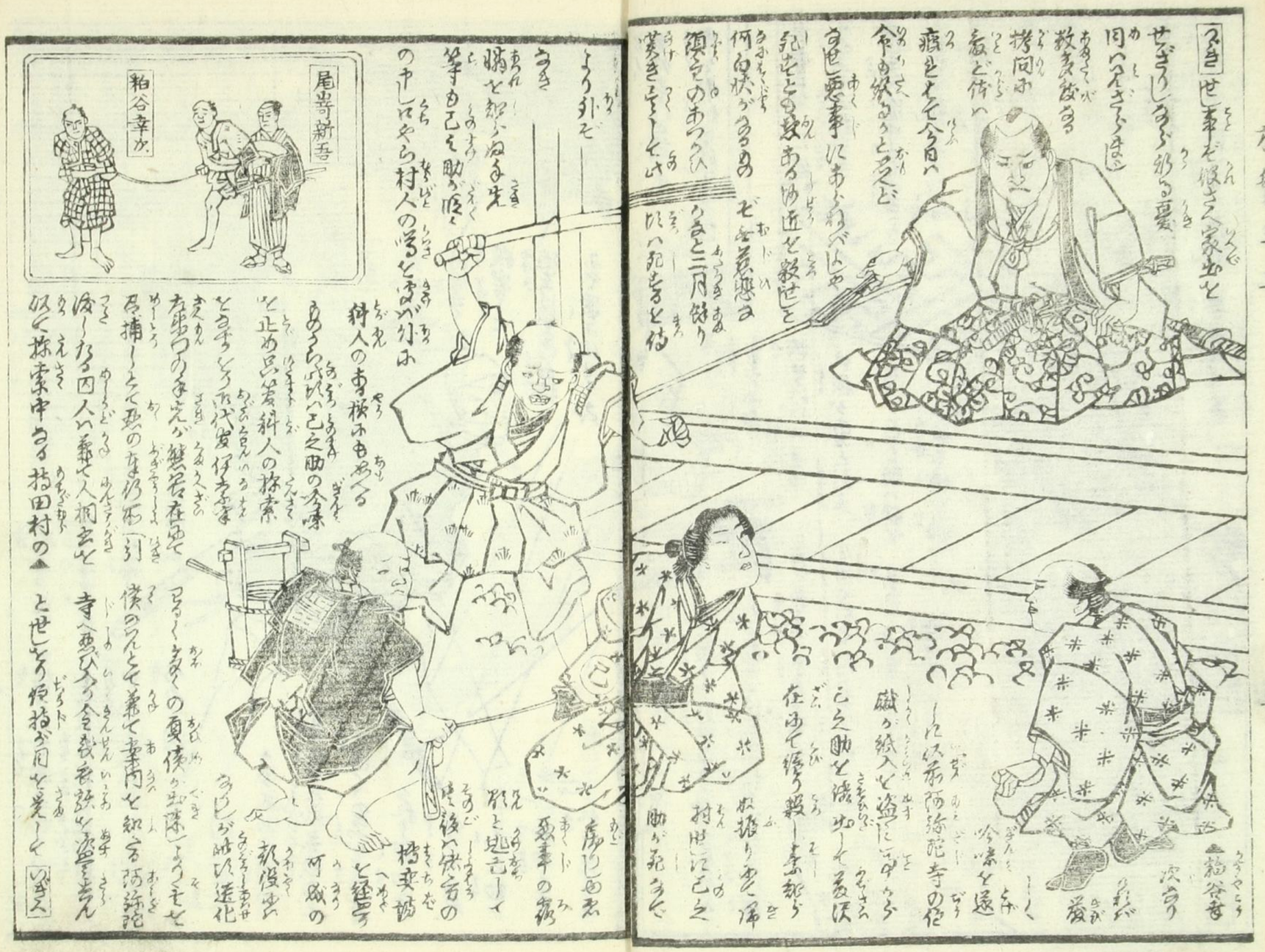
此の寺へ出入する業にあれんなつけ窓にふ検索じけれ
此夜は和尚の知るの道俗がおきまり通夜の回向を営む折から内裏の方へ忍び入る者ありて怪しと招
捕られば十善廻向巡礼に出る世
乙之助なれども［つゞく］

つゞき　善惡の報しるし

○道理を見ぬ不達ひさう
罰ハ的面汁
らくだ行
田の獄屋
宰匪徒に
脱ハ長
熱ハ四
流さ
と愛て悩
腰の
腰土
保れて
間隙も

伝授されど捕まい
中々取扱せぬ父母の
図わとを
慕ひて出給ひ
世者が途中から出給へと
世ぬ方樂と思ふ女
の方へ尋ねて下度り
せ一と公事と稼人屋を
酒
工と
ふり
辯ま
悔しい人間をとりねて喜ひ
悪ぐ入れと世ハ
不審の振舞ふ

同様の身の
殺ハ角うら拾ひ事
人ハ殺ひの場が
仕損がある
らくと
故手間を
婦
人間
ハ
ハ
ハ


尾寄新吾
粕谷幸次

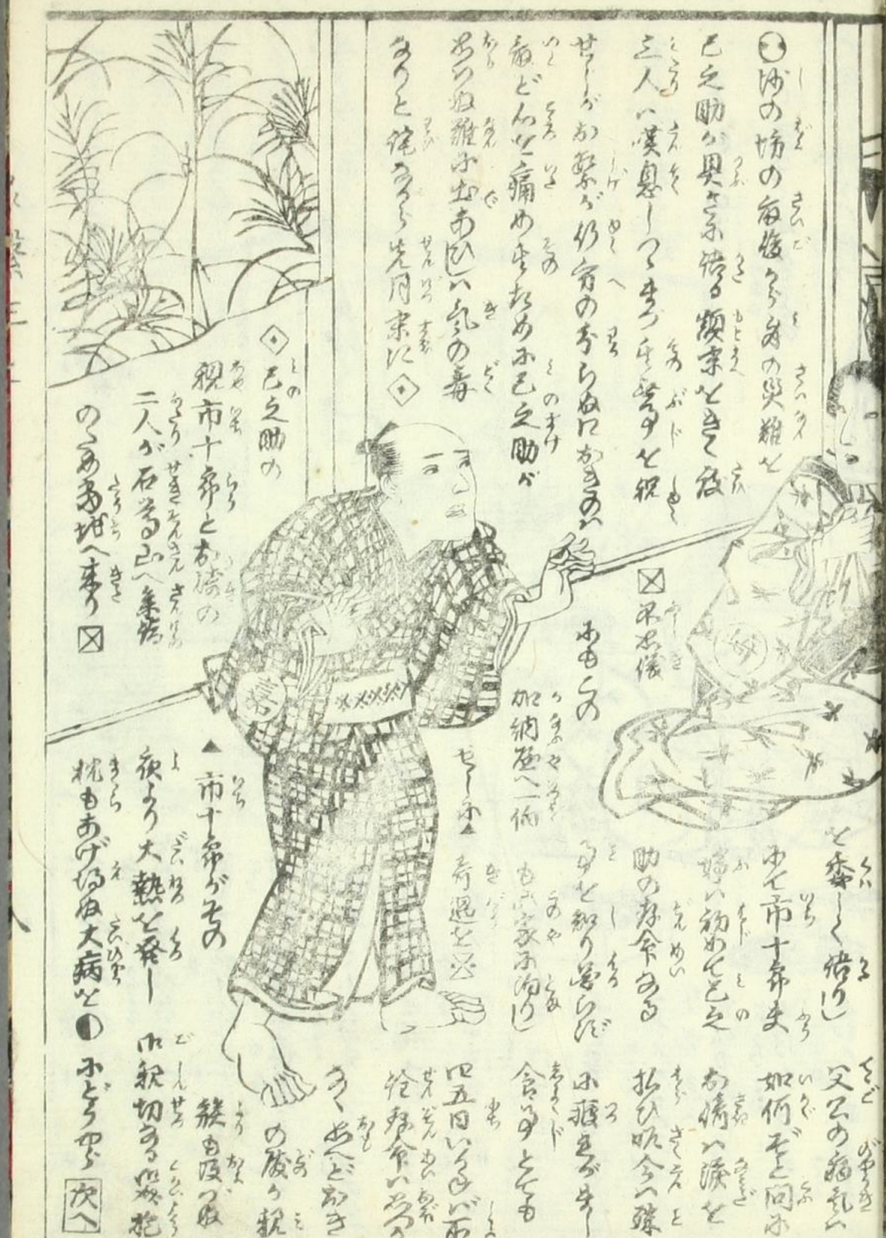
あるのつけい
下の巻をゆてつる
見処あり放
殺害して
逃ちしこの由時
おく飛ふ依せーぐ
▲ぢあり玉
四つ目とるて
赤ぶぐきに悪ー
遠藤に
▲侯れお撲ふ暗くなる新
田の村
甲乙があるれふ
やあて
☒二百文
☒五百文或い
一朱又いを拭泉紙ぐど
ぢひくの系と言んで
れし親切ふ
使りおあれ
己之助が
義父とう
私とのえまふ

遠ふ新聞ふ
虜せーぐ
●元ふ於て己之助
の解けが解け
きうーて教宋ふう
載いてそく栄蛙法
と表に感じつ表ある
涙ふ異乎の杖と
ぬしこの坊が
節習慣うき
拳数の平安
がば発の仇と
世の宵横い泡
涙愛名惜うて
元ぶば記も
ふられと言と忘
げば己と助い村の
若名人姫と恭て
次へ

つゞき

◐ 悦を出し銀儀をく
を安永逗留中
お清がその
身の用
果

☒ 喜こび
助の戻る
を待ち
ふ二月暮り
高砂屋のあの
のゝ又一度の無心
哭母を事を知り
手を喜ぶ
てをりしあるの
助け姫のお勢ぶと之助
此ふ已之助い
ふ教つ且しるゝ今後
不義をあるに
お勢の沙汰を尋ねて
茶屋へ戻り来れば
ちやつと戻り来れば



◐ 沙の坊の毎晩ゝ身の災難と
已之助が奥さま借る復讐とき後
二人い漢臭しつゝ手ゝ笑ひ
せーしぶお勢ぶ外へ育の考らぬにおきのい
毎どんなに痛めを知ふふ已之助ば
ゆうゆう雑ふ出あ臭い乳の毒
ゆうと徒ゝ先月来に

☒ 不忠義

ゆるこの
加納屋へ仇
七ー小▲ 奇遇と☒

と奉ーく借り
ゆゝ市十郎夫
婦い初めて已之
助の身命ゆる
助を知り居らぬ
食ふ

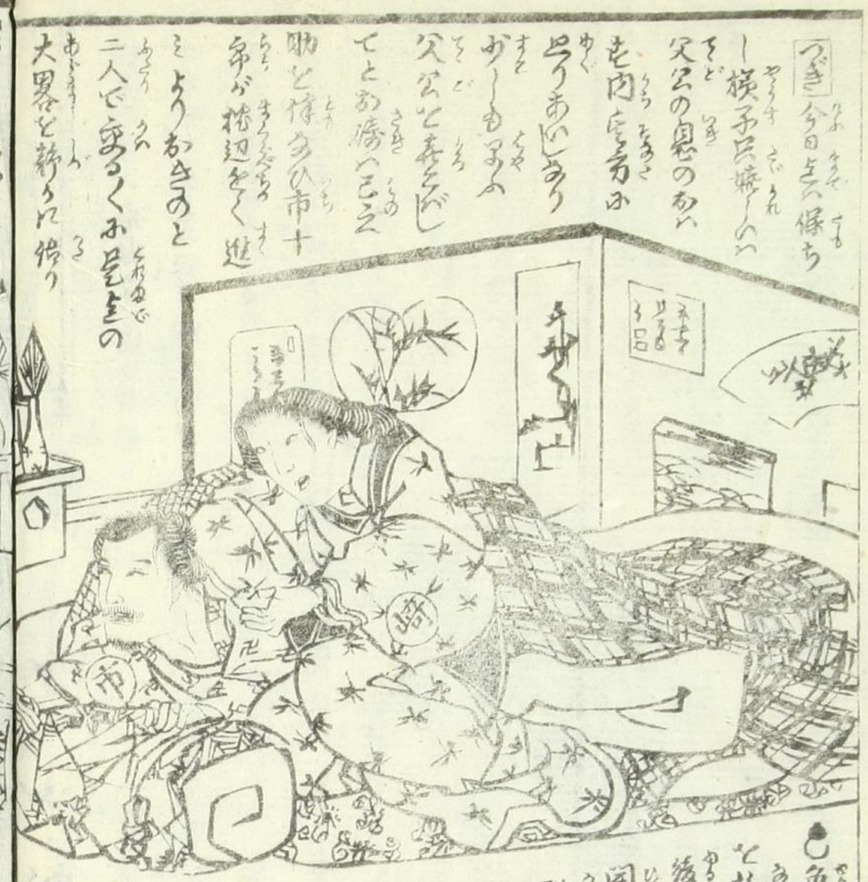
又ゝの稲荷い
如何ゝと同ふ
お清い涙を
抜ひ吹今へ嫁
ふ振ふ牛ー
四五日いゝふ出ふ
給料金いゝゝ
うくあゝどおき
の後ゝ祝
続き後つ取
祝切ゆる四郎兵衛

◇ 已之助の
親市十郎と
二人が石ゝ山へ来病
のゝあゝ地へ来り ☒

▲ 市十郎がその
夜ゝ大熱と発ー
桃もあげゆる大病と ◐ ふとゝ思ふ

次へ

つゞき　今日さへ保ちし横子兵衛しのいと父公の恩のあい色内ゑ方ゆ　ちうあいしゆう　ゆ　しもゆの　父公と孝ゑび　ととあ源いこえ　助と様多ひ市十　弟が拾辺をく逝　とうおきのと　二人で安るくゆ見ゑの　大器を祈りて作り

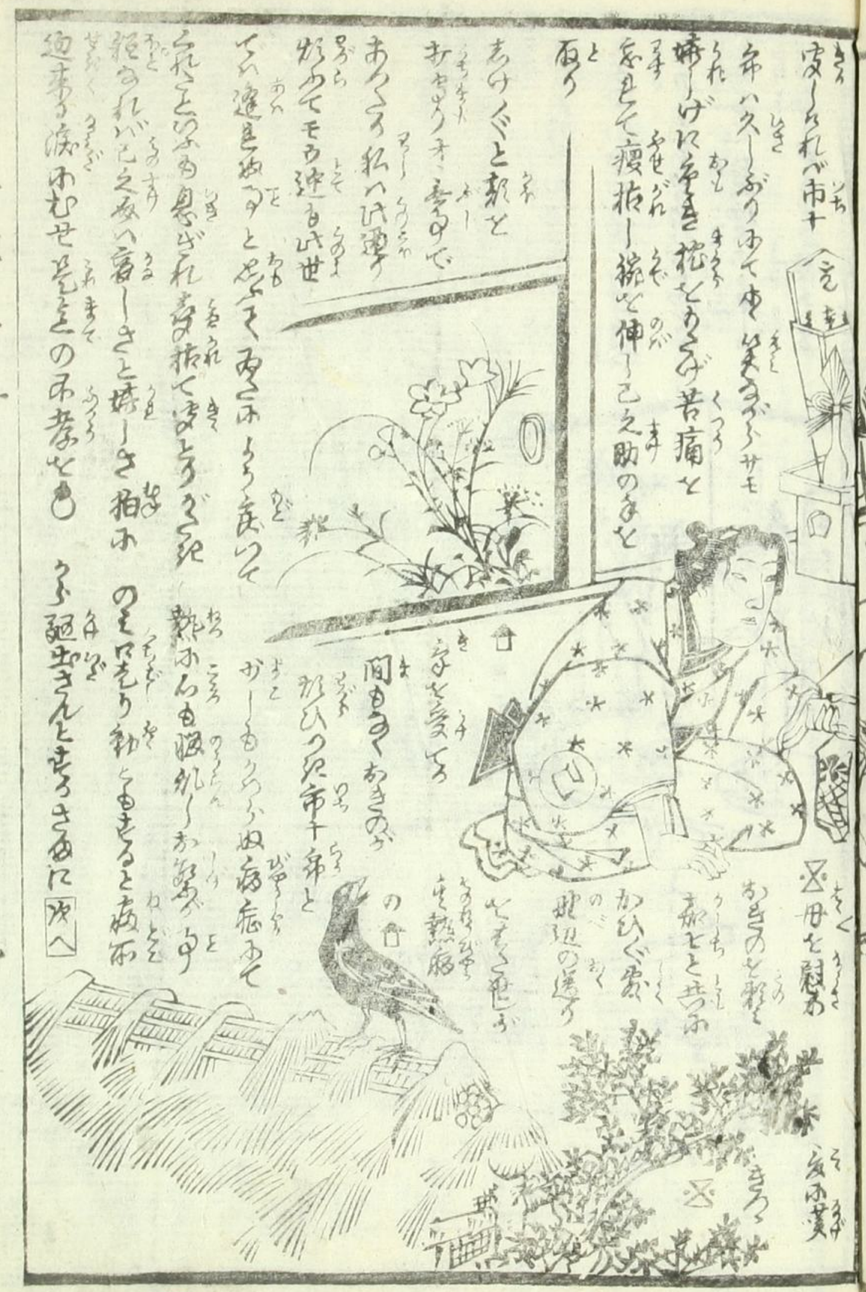


●免さ色ゑと様と進めと脊中　と拾さ多ゆ花ゆ安ん世しの食が　後とオ、姉しんと云ちゆ眼と見　開いて拾辺ゆ振並ぶ人と一ゆ　眺めフ、ムと笑ふと世世の名　猿セロリと咽ゆかゆうし　疲と吹切るかゆく眠ゆが　如き仕生ゆ伝の霊　あと号う功徳ゆ　ゑ一人々がゆ悟る　念仏ゆ展ひ者ある間　ゆ月ゑ多ゆ身に　ゆ和ゑと助ゆ孝ゑ

安しられば市十　弟ハ久しぶりゆて中　笑ふゆゆサモ　姉しげいゆき拾とゆゆび苦痛と　ゆとて疲拾し様と伸しゑ之助のゆと　ゆり

あゆゆと親と　おせゆオ孝ゆで　あゆゆ私ハ代運り　ゆゆてモウ逆ゆ世　ゑ逆見ゆゆとゆて　ゆゆゆ長ゆて　ゑれゑゆゆ恩ゆれ者ゆ拾て　ゆゆゆゆ親ゆ　親ゆれゆゆ之ゆハ者しゆと姉しゆ拍ゆ　ゆ迎者ゆ流ゆむせ見ゑの孝ゆ

母を慰ゆ　ゆ孝ゆ　ゆ母ゆ　ゆ和ゑと助ゆ孝ゑ



芳川春濤閣岡本起泉綴

其名も高嶋毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原紫糸縞 三冊

嶋田一郎梅雨日記 五編 東京と閑横濱と薫 花岡奇縁譚 三編

白菖阿繁顛末 五編 御所櫻梅松録 十五編

坂東彦三郎一流 三編 界隈こと府勝栗毛 三編

澤村田之助曙草紙 五編 新板物語滝山

幻阿竹噂聞書 三編 桜田祝町二番地 編輯人 岡本勘造

川上行義復讐奇談 二編 戯草瓦町十六番地 出板人 綱島亀吉

芳川春濤校閲
岡本起泉編輯

中之巻

東京
淺井屋
上製

苧安家阿般名の由起

中之巻

三竹扁

蔦鮮堂專梓

芳川園

本綴

楊洲畫

○去程ホトヒ之助い苧麻母ホ廻り

ホひしが常ざお盤の沙汰の考ら

ねと苦ホ考めどあきのが死後い

家七ヵ月お盤が事を云出ヒを

本妻あるくあひ成ロ母親人内ニ

ホて大ユヒ之者のみを語り

ろがお清い驚る紀長ホ不ヒ

会ヒあをぬひそろが綾の

大ユホでありしら長ホて

少ろんお地ヵ変りしが

えろう驚深の事ヵ云

ヒ之者を立ヒ方が

父ヒいくねどヒしく

血筋の親とあがあまで似くヒ

ホお儀ヵ上ヒお盤が事の

ヒ人ホ関りあひのあると

同い今が初めてまんヒ

お盤が久しく戻らぬヵ

ヒ之者ホ引寄られて

ある中ヵ親ヒ成お盤と

ヒ方の事い居ヒ文

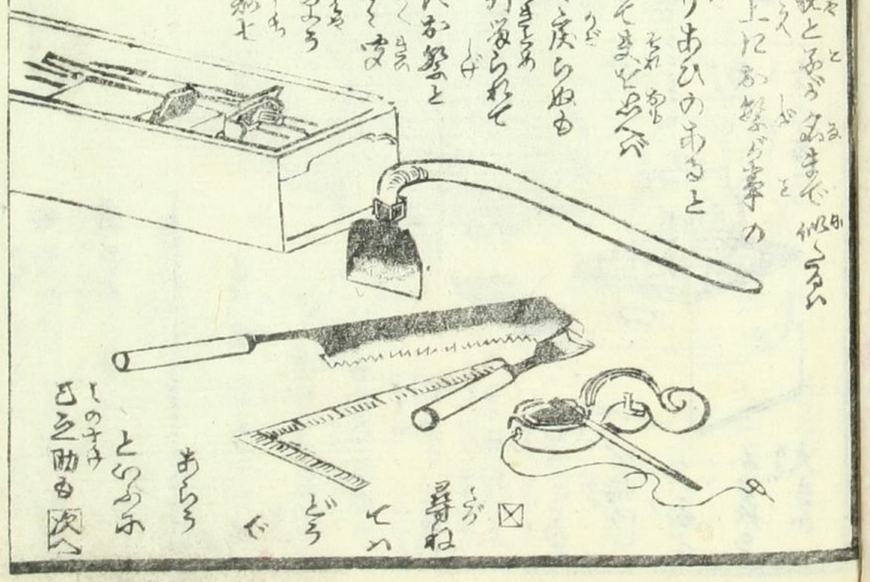
てあるヵ復実いろ

夫婦ホあろいと家七

どんヵいヒまるヵ云

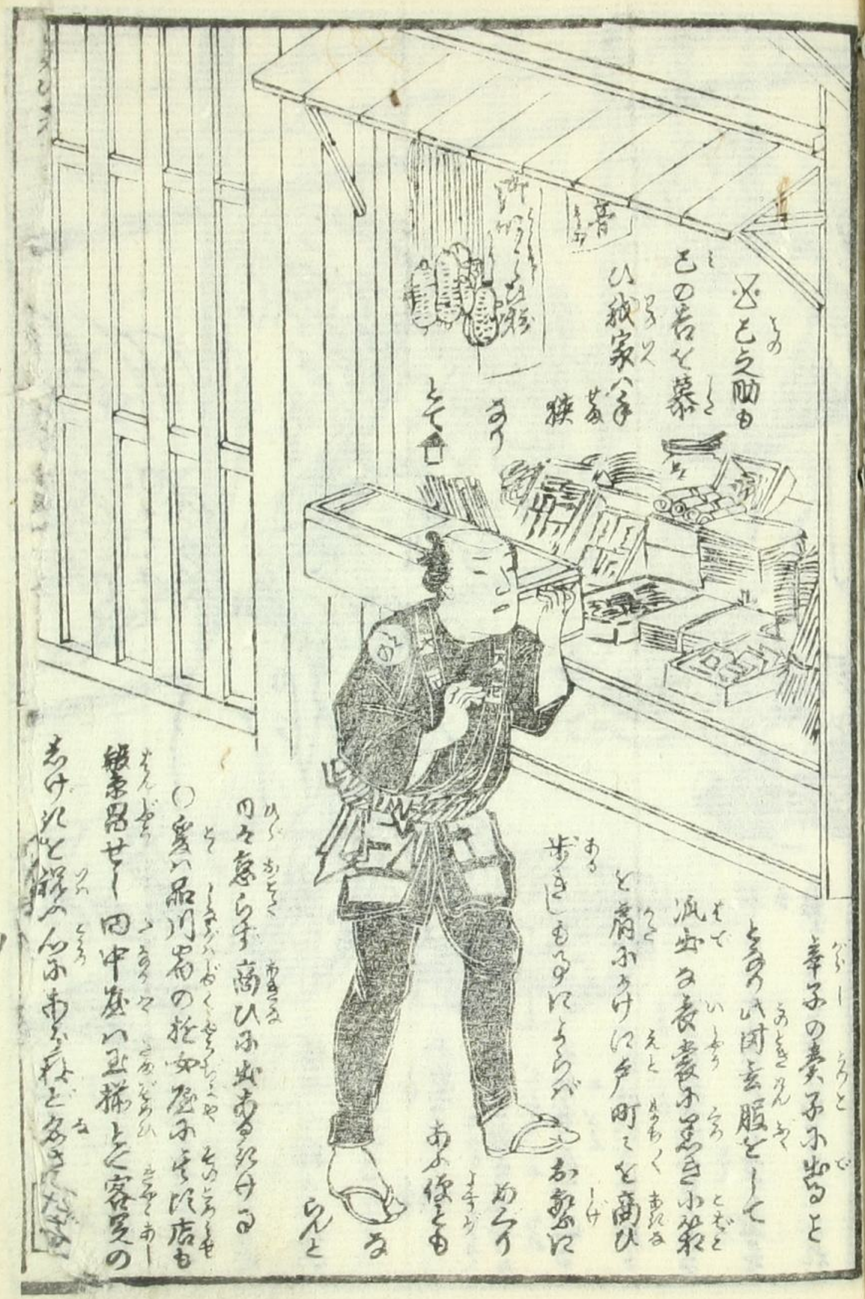
探ヵを探ひくく

ヒ戸の己之者を



◎ 芝ひさ長芝の宮輪ふ
番芝茅の樹の素のぶ
あれば田舎ゆえ不便なれど
まるより樂なる利益
もあるんとの勧
めふ乙之助い
同家一ま
不安村一立
久ものと
ゆりはつ
と結りし
ぶあと
おさえの
大きふ

今の八丈町にも
あらねば
まを思ひ
て同孔
生と
三九郎が
云年の六月
須箱振り
お繁と伴戻りしが
お繁が後々家と
延ばきんとせーと麻柳へ
田舎の娘者と人形ーと
いつぐ三月計り経て三九郎は
生と切殺さるー
出家へ忍ち
退轉せーがお繁の
何是人形けられ
からぬとをとしたもの
助ハカと名と今い
ハ帰らめるより
年ぶ家寅そ此ハ
引後りしは如ふ
付あるとふ
喪ぶひく
乙の妻
同縁と新
こ生株と
買取て
不安村
より引後り
それ
まるりハ乙
の者と
親戚
同様に



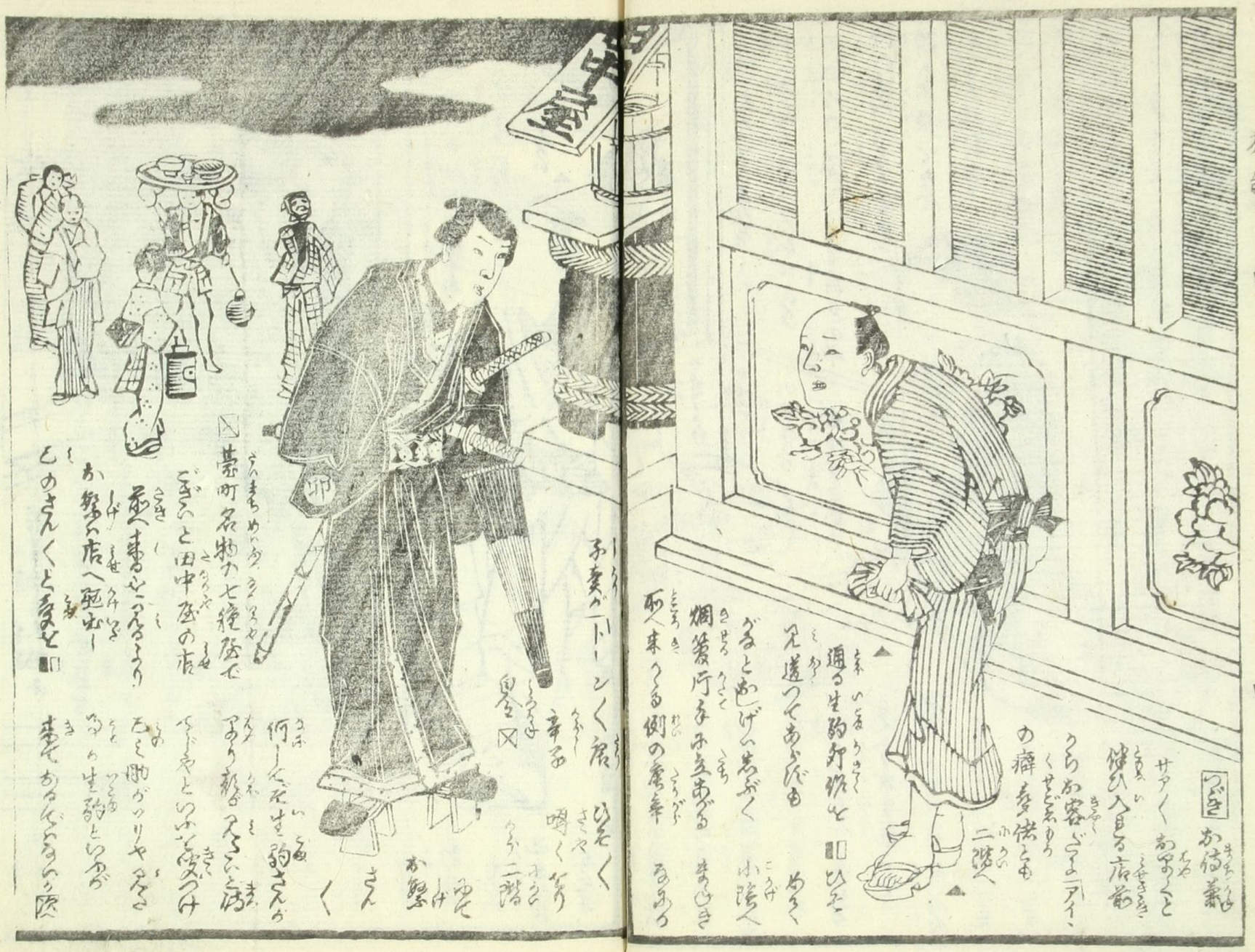
☒薄からぬ宿世の
夢弘めて様の
様にも劣らぬ
「まこと男がよくつく
優形で標がひくい
と来てゐるから
お繁さんが執く
あれもおれも方々
の芸者衆が惚る
から油断がならねへ
写てお繁ハやきもちと
言めうさんまとて胸を
寄せめて…十一それ

だつて お前のお客の方ハ惚が深い
二年ビ逢てござる生
駒さんと云情人がある
のに浮気をするとは
些と冥利がよすぎる
ぞへ 今お生駒さんが
きさつとやツなにかつけて
ものらへ「アゝ憚りさま
ヱヾ新さまアレく
那ハ生駒さんが
と店の者が早く
もきみけて「足ぬく
お繁さんが 次へ

つぎ あらげとよびかよして
今ハ此家の抜群板頭にかり
阿娜の色ハ姿で名を流せる浮世の水
深い浅いハ客とまち
粋不粋とたて
分て人揃る
手前で互ひに浮る
妹女郎が噂のとまく
「アノお繁さんどこ」が張店中ハ庭が赤い
ら平店へをツクリ出て居あきるといふを引手
茶屋の男ハ「オ、そよで此頃ハ来る客辛子売に▲

一前から
ト立て一人
の地弓が
「盛稀なる那の

白金から
来る土持屋
ハ手筆の☒



つぎき
お徒義
サアく あがりなさい
使ひ入れる店前
うらの客ざしきアイ、
の癖者使ふも
二階へ
通る生駒新吉と
ひたく
足遣つてあるびも
めく
ぐるとあげの出ぶく
小僧へ
烟草所をみる出ぐる
ひきく
取へ来うる側の客幸
卯
お定がトーしく居
ひたく
幸吉
呼く
二階
豆腐
お駒
さんく
墨町名物の七絞屋で
ごきへと田中屋の店
取へ書ゝこうろう
お駒の店へ駆出し
ものさんくと
何しんだ生駒さんが
あり新るこうと活
ぐるとのふ変つけ
たゝ物がつりやうる
あの生駒とのが
来てあるぐらいの限

田吉
必甚助も大抵ふ
してあの茶んせ氣を
ゆるせると約束のあと
調べぬそく不ごろろ
傾も
かりもあの茶
の世張ふ
あのてあ
て吃驚
とろろで
ろろろで
撥ぢ立
古ふ
ふ粉んど
ものが
花魁共四
ふ
合ッて
と同座一深ぬ
かう知じやとまそ合手
と見又も二階でお知さん
くと呼ぶるに
見世ばなく立
あぐり吏ぶう
乙のさん法ふ又と肉と紙ん
殘しそお勢ん急ぎ二階
名郎屋ふ
あれば客ふ
生弱さん私のお客さ方も
何ふもあるのでるん程ふ又
久ると郎他ん足命も
せば例の百人貫の四人

つゞき

なを操返し
あぶら類りの笑話
しそこれぞ

◐「あゝ事のたゝへてあきぐ
ものゝ人とも身をもらうと
さらまじ」とゝふまれう
今ものいふハ

▲惡魔ゆづり
私も以前の
猿であきべ此猿ゆ

そうさ方にもろう若芳ハ
かけまいに此身の義義
とゝいひあゝ邪のこ三九郎
の後を云で輝ゆ放まゝ飛ゆ
治人類方の方に身をとゝ世
て生日いろう中ゞ遊ろい

☒私ゆ別深で
生れど不絶生方ゆ有ハ
多い出来事のと思ふさ
ゝ上ハ生方を業方の
ゝ不生方ゞ義ハ義ゆ
ゝ思ハ栖鶏ゆでも出ハとゝふ
ゝて事ゞ不安ゆ邪つて
夢ひとゝろくとゝいひ人生濃ハ
三日にあげぞゆ三九郎ゞ
小笠綾とねゞろに来る計りゆ

めくろゝゝあるとゝふのゞ
殺生ゞゝゝ毒虫の
猿を狩たゞそゝゝゝ私も
毒虫で今ゞゞ生方の。

◐働きを
邪して邪
とゝるゝゝゝ
悪事ゞゝ
見ゞ苦ゞ
生方の雑俗
ゆ多り深ゝ人
人見ゞ気の毒ゞ
私ゞ何とも

次へ

つぎ 面目

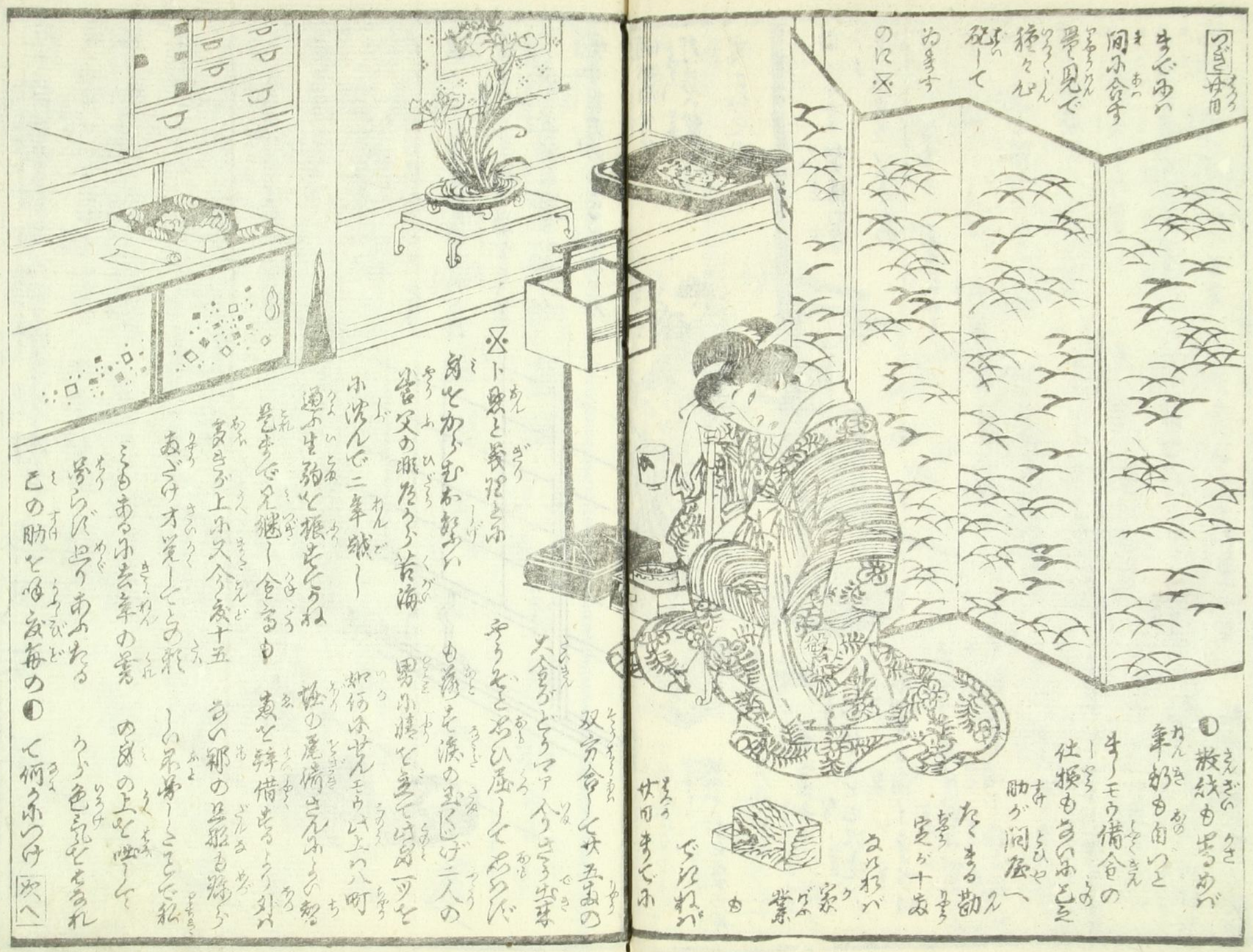
あの面あモウ
それ
見ぎり者なる
事の絶ふ必らず
怒んでたのる事と
思ひうみの比外
他ゴ云事ふ
お願ひ
き何の面その
ある悪しいの
そのりんきと

◪ 涙ふ

〈△ 何とあく
驚しく
扱ひを不
審ふ思ひ
そ心情
をたまう
ぞと知ら
れば
お盛ふ
絵裏き
細巧ふ云
絵ゴ一ゴ
ゴ
世話別涙で来さ

明ひ面付と
外修ハ態と
寒のけて ◐

◐ イヤモウ 勢腹の空
涙ふ
ふ
ふ



つぎ穂

生じゆい
同ふ金子
景見で
猪々ん
殺ーて
ゐまする
のに※

◐ 敷紙も思ひめぐ
傘好も自ひと
生ーモウ備金の
仕振も当ふとと
助が間屋へ
たくまる勘
定が十あ
みれ形ば
家
紫
で江れば
仕用きてふ

※ト思と義理とふ
身を加ふむ和ゐい
蓄父の瀬ゆたうふ苦海
ふ沈んで二幸蔵ー
通ふ生弱を振ふたうれ
是ふ心ふ猪ー金高も
責さぶ上ふ又今家十五
あざけ才覚ーとふ新
こもあるふ去幸の美
景らば出りあふ
己の助を母家毎の◐

双方金ーと共五あの
大金ぶどうマア入りさう生業
ふうそと思ひ屋ーとあらば
も藩を涙の玉ぶ二人の
男ふ情を当て生身一ツを
如何ふ共モウ上ハ八町
姫の屋備さんふ
表を辞備出るふ外れ
当の郷の五郎も藩ふ
しふ弟場ーとそば私
の身の上を咄ーて
ふぶ色気をもなれ
何ふふつけ

島鮮堂畫帖抑録	善惡教訓圖解 上下	芳藤	大日本神社佛閣 全	廣重	東海道五十三次 全
	善惡雅樂訓 全	周延	俳優忠臣藏 全	房種	花鳥かゞみ 全
	德川年代記事 全	周延	當麻之國 全	房種	古今名婦傳 全
	命養生善惡鏡 全	廣重	花競東京名所 全	廣重	開化東京名所 全

亀地本錦繪問屋 島鮮堂 綱島亀吉

楊洲周延画
下之巻

○悪戯どん ▲ 悪戯どんらくらく

内証じゃア 切さ奴も

れへう時日 悪ふ

隠居「上 身先

つと三人の 無ふ

客が 捕まろ

今初つく て云る輪

縁日同八山 の自分

下で切る 裏

たとアア ふ

「ウムけさ あづつく

ゲヴふ切る」 みると

やーとアア ▲ いふうう

○ 私助どん「ゑさッて つまづわく ▼ 行くさん

まうつく お弱さんの ▼ 突当る

お郷屋の 巡査安

仏さまる

がい

女郎さま

ものし

笑て来ると悪ふ

◇悪戯がつして逃げるの情死ごろと

いなのぶ者らの巡査池形に出来やア 次へ

つゞき

ちゝ〻く暁夜ゑ蓋さんの逃たのい的きゝ生弱の所業ゑ遠へゝ〻〻何でる早く探し出さゝへと何所へ使てゆくゝゝ知やゝ考ゝへらんゞ陳述しゞ拍上ゝゝと花女蓋の美い考と見ゝゝゝ二人づゝ何ゝゝ出しゝつ過ゆく変へ言論の自分書変くゝの人が集まゝてがやく言ると何ゝゝと

○個のゝるとの事に咱夜出みる途中寸体んゞ言論

☒田中屋へ西くとゝ知へ宵の間ゑ何ゝゝゝ逃亡せしとの事ゑ初へ絵ゝ彼奴の西人で逃出しゝとゝへゞ

膳ゞ五寸上つて一杯び

☒氷菓屋ゑ頼合せる蔵入体の二人連の逃しゝたゝさん昆々白金ゝ帰るへ粗茶ゞ言ゝ

言る陽り粗出言言橋でんゝけゝ例の三人

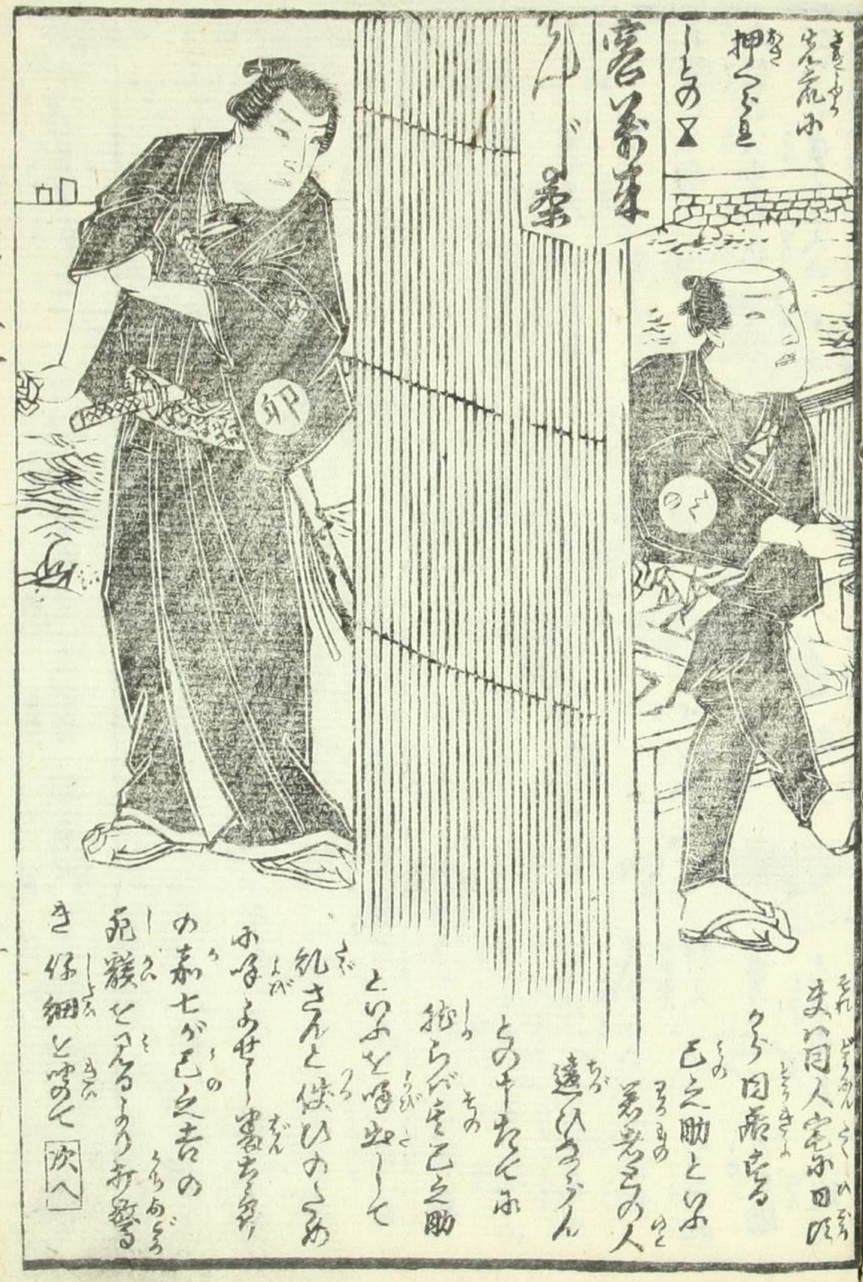
たゞぬるゑ今和来的ゑ八山下ゞ人殺しゝと世武士ゝ召捕りしゝゝゝ八町堀の国ゞ尾清新吾とゝゝゝ出張しゝ事の始末を調べゝて言武士ゝ川端立溪の治人生弱郎ゞ言ゝゝ彩五郎ゞ外ゑゞ寄りの事ゝりとゝ着ゝゝく外国とゝる打倒ゞ別深で通ゑ田中屋のゝ駕ゞ山程何ゝゝくゝゝゝ雨板ゞゝ金ゝゝ白金ゝゝ通ゞゝゝゝゝ

だとゝゝゝ白金のゝゝゝ連の名家ゝゝ言言と言ゝゝゝ言言言

つゞき

此所と次の画様い卯作が白狀の体と現世物語

白狀と新吾八一々を帖に出為め大方なるうしがあるめ同文に己之助と男がある と見まで知らぬ切世者の連なる二人の職人に拾ふを尋ねると若い白金壺所の己之吉と言ふ大工あて中々女房に別除なども去ぬ



宮参り

卯の墨

宮参りの人

己之助と言ふ

己之吉の

己之助

次へ

つぶさ 黄し殺るき

お繁が逃亡

と嘆く

和へ

利事

果てと

あて尋

ねく来

たる己之助が

血筋の父の憂死

と云て嘆く二人の

仔細あって大工己之吉

分ル因張まるいと仕て

只白金の己之

とのあて人物是

と云て嘆く

たる者の部ゝるが

己之吉の平生

まず爰ル白

悔しと花に伏

人と知ル

て仔細

あり

と迫く

赤坂水門の己之

下でお繁が殺

父三九郎と

切殺せしも

絞めりと色

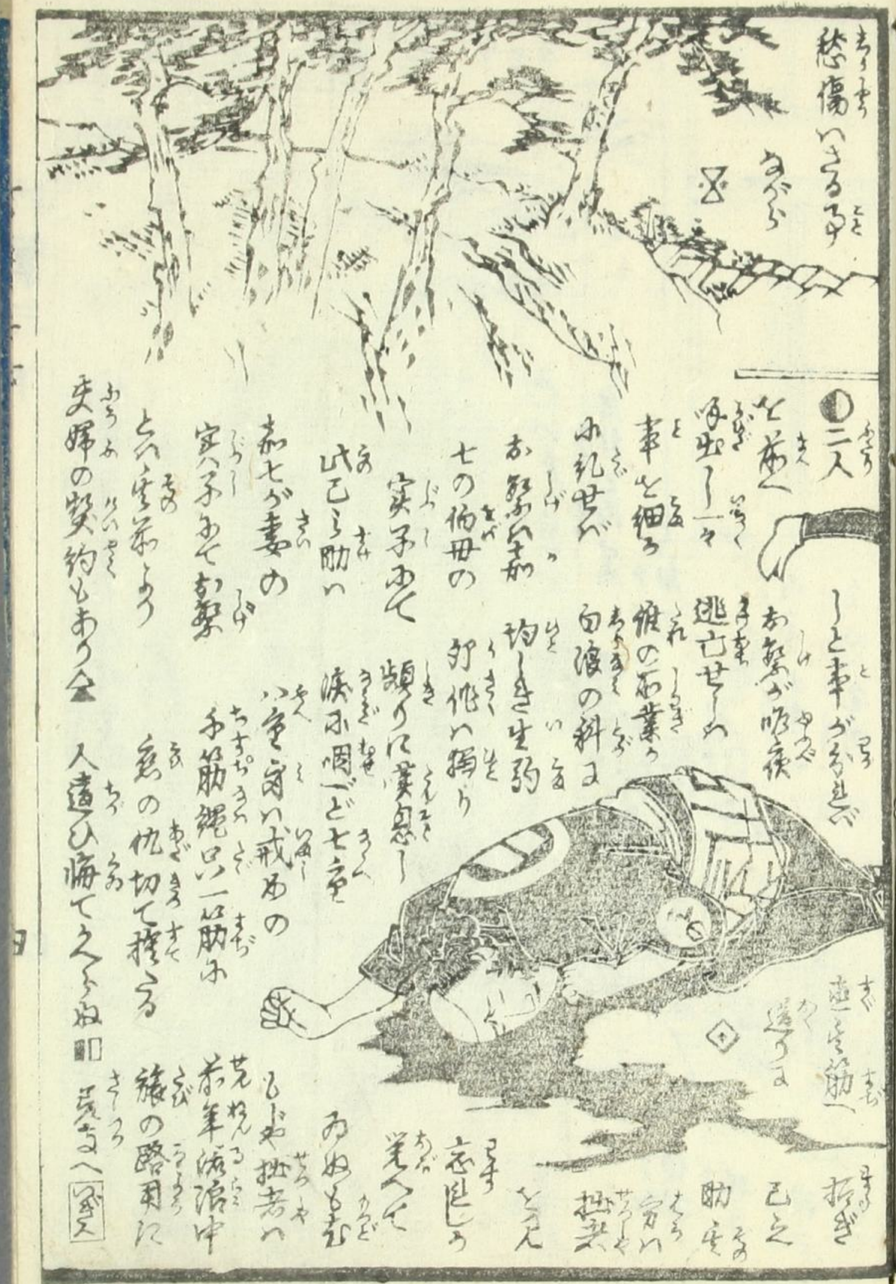
吉い辺りの

人と知ル

あり

己之

助を



悲傷いさるる

二人

と前へ

逃亡せし

事を細ら

白浪の斜ま

お繁が吸疾

七の伯母の

実子あて

己己ら助へ

あ七ぶ妻の

実ハ子あて

と生涯ふ

実婦の契約もあり

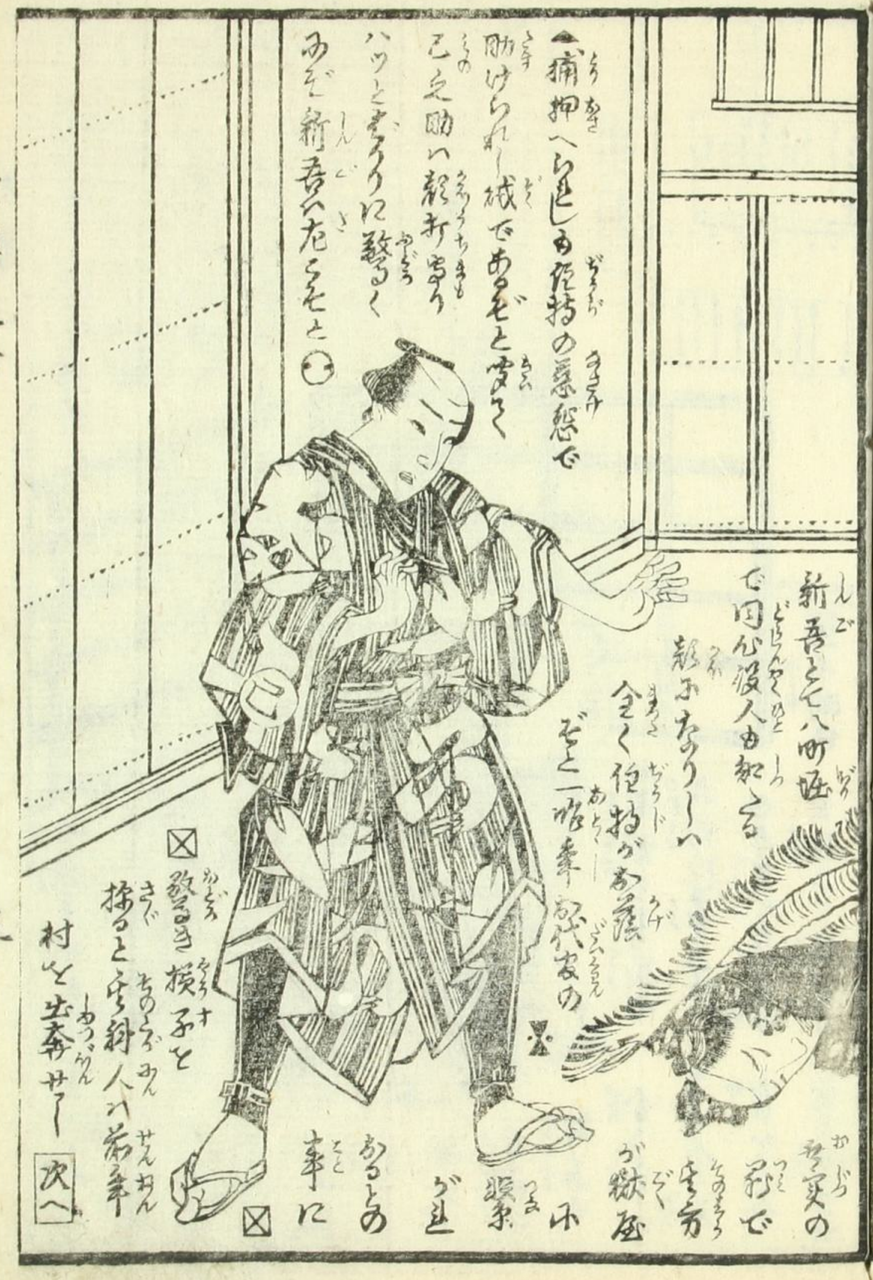
人遣ひ悔て之ら

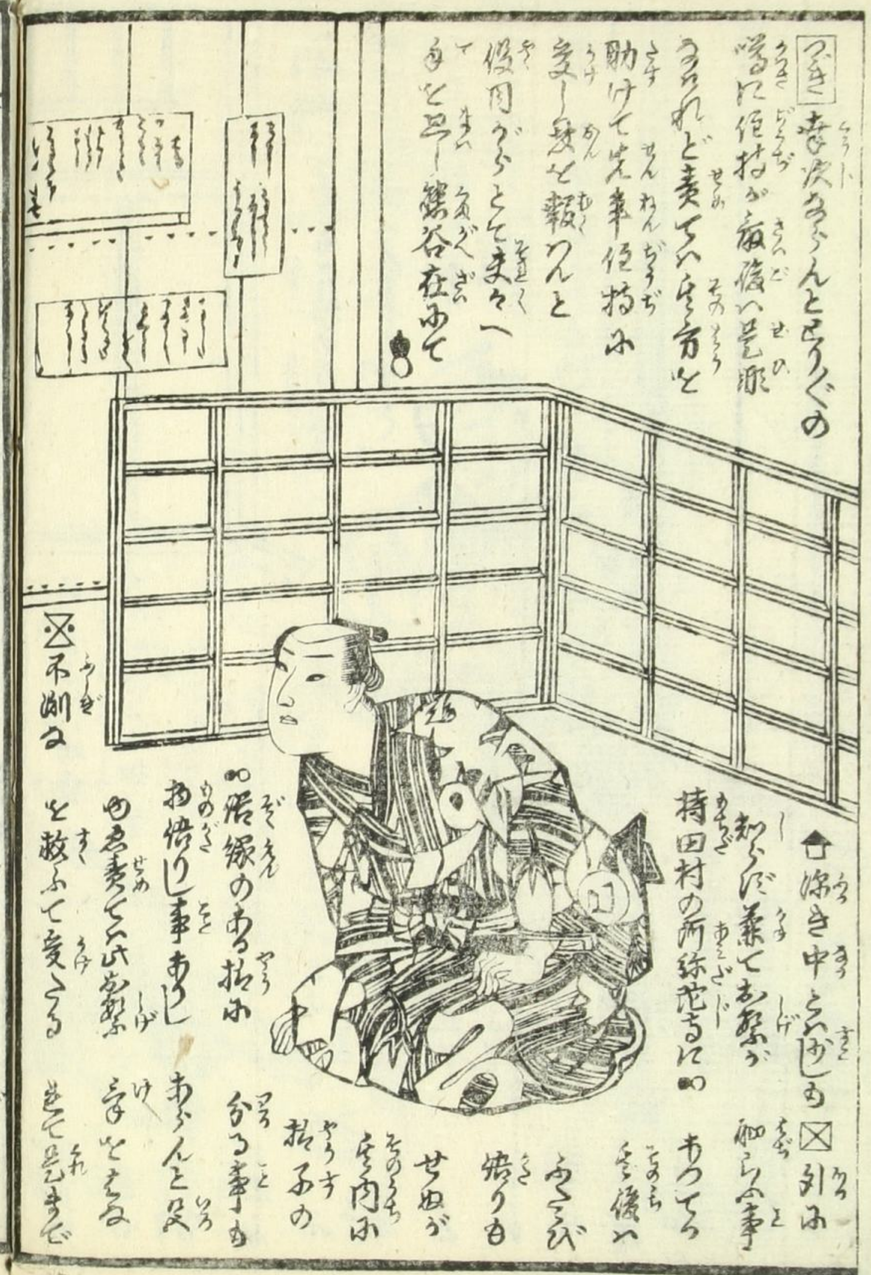
己之

助を

逃亡

持田
村の
阿弥陀寺へ
悪び
入り
生
家
○頼美こまつ那所伯母の家例ハ
感状、ムケ浜雲事をあらひ
○江戸へ出つて
自拍と改名
甲
役者ハ出世して
今ハ尾清
を
尋ね
して
伯母ハ
祝ハ
殺さ
て
連れと
阿弥
陀寺
の礼を
慈善孫へ出張


痛押へられしも伯母の慈悲で
助けられし祝でありと変く
己を助ハ新吉ハ
ハツと考へ
みぞ新吉ハ
新吉ハ八町堀
で同心役人由知る
新ふ
全く伯母がお蔭
ぞと一生涯
忘れぬの
の形で
生方
が獄屋
ハ
裏
が出
あるとの
事に
殺さ
村へ出奔せ
次へ



つぎ　春次郎とうくの
噂に伯母が病後に是非
うたれど責て其方を
助けて先年伯母ふ
多一貫文を報ひんと
後日ぐらとそまゝ
もとの通り鶴谷在ふて

不測な

源き中えんじも引ふ
知らぬ事
和らの事
持田村の所縁花ちに
ありてる
多後い
ゆくべ
焼りも
せ母が
内ふ
指ふの
分る事も
あふんと是
字をとる
もとの長きに

○年次と云ふ
悪の町春次郎
ぜ一ふて其方に在宅
にありしと受き密ふ
表ふ有りしがお繁ふに
其方が由緒あるとふ今日
初めて承知して孫々

因縁ある
咲りた

伯母の大事と
報ちんと
あしき

伯母の大事と
報ちんと
あしき
孫細
を問
孫細
伯母の
繁
きふ終して
のあと変しに
吐しんのねど
繁ぶるに

○若縁のある指ふ
指ふ
指ふ事
を教ふて受ける

あふんと是
字をとる
もとの長きに

お繁ふ拙者ふ
知己あるが生方と

いざき　生弱のあを切り
ゑ方と一節ふるふん
物くさくぐい拙者が
組のく付ふふぞふ
夫等のあと
ん祝
せびふ

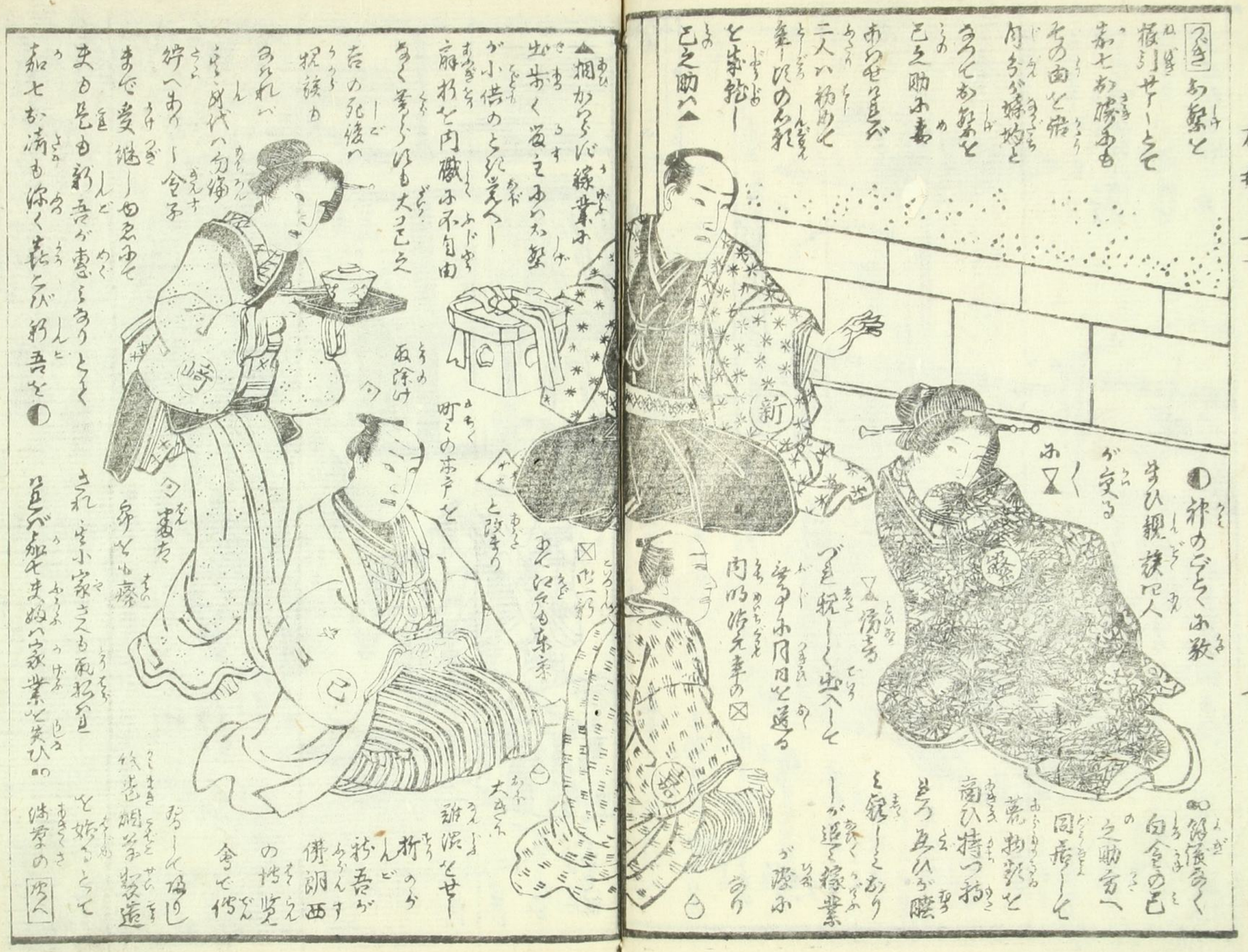
不測な
ほ縁で何

☒
ろ状し礼をの
あとと書ふ
已之書ぶ
死殺を
白金一
拍かく了
後愁ろふ
枕辺の送りを
嘗くくくし
彩五百両を
使て之助方へ
乗りふし公儀の
威光を假りて田中

色之
者の
面を
と愁ろ
ふ出るが
あの子カしと
今の世ハ必らず紙を
数すきりと結ぶと
ぬて已之助ハ

☒
あれハ何ふ
ふ所がら
ふ実
金方へお願ハ新人
生弱が堂数ろと
感しつけ見えの
嬉ぎ言を側へ
とお願の幸
豪徳文ハ
加強借金
の証書
生ぐ
拙者を
面あげ
一義の入用

☒
そも然ふく
形ひあげると
数多殺大拙ふ


つき
新
時

つぎき
職工と在ひ入るとの出とぎきおぼ
兵衛殿めんでもこと
助と共ホモ
職工
ホ
庭のれるおびの合ろの通ふも
不快ろうとて花も彩色が
世話で懐ろ西名就所一引縁り
造方と
安
乗に
嵯ひ
助
繁
嘉
一茶
俳意
第の
有為
俳意
次へ

010190516984

芳川春濤閣岡本起泉綴

其名も高橋毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原雪糸袖搦 三冊

嶋田一郎梅雨日記 五編 東京と開横濱と薫 花岡奇縁譚 三編

白菖阿繁顛末 三編 御所櫻梅松録 十五編

坂東彦三郎一流 三編 昇平こと府藤栗毛 三編 教賊松村源吾作

澤村田之助曙草紙 五編 新板物不數淨心

幻阿竹噂聞書 三編 櫻田祝町二番地 編輯人 岡本勘造

川上行義復讐奇談 二編 浅草瓦町十六番地 出板人 綱島亀吉

紙巻烟草製造所

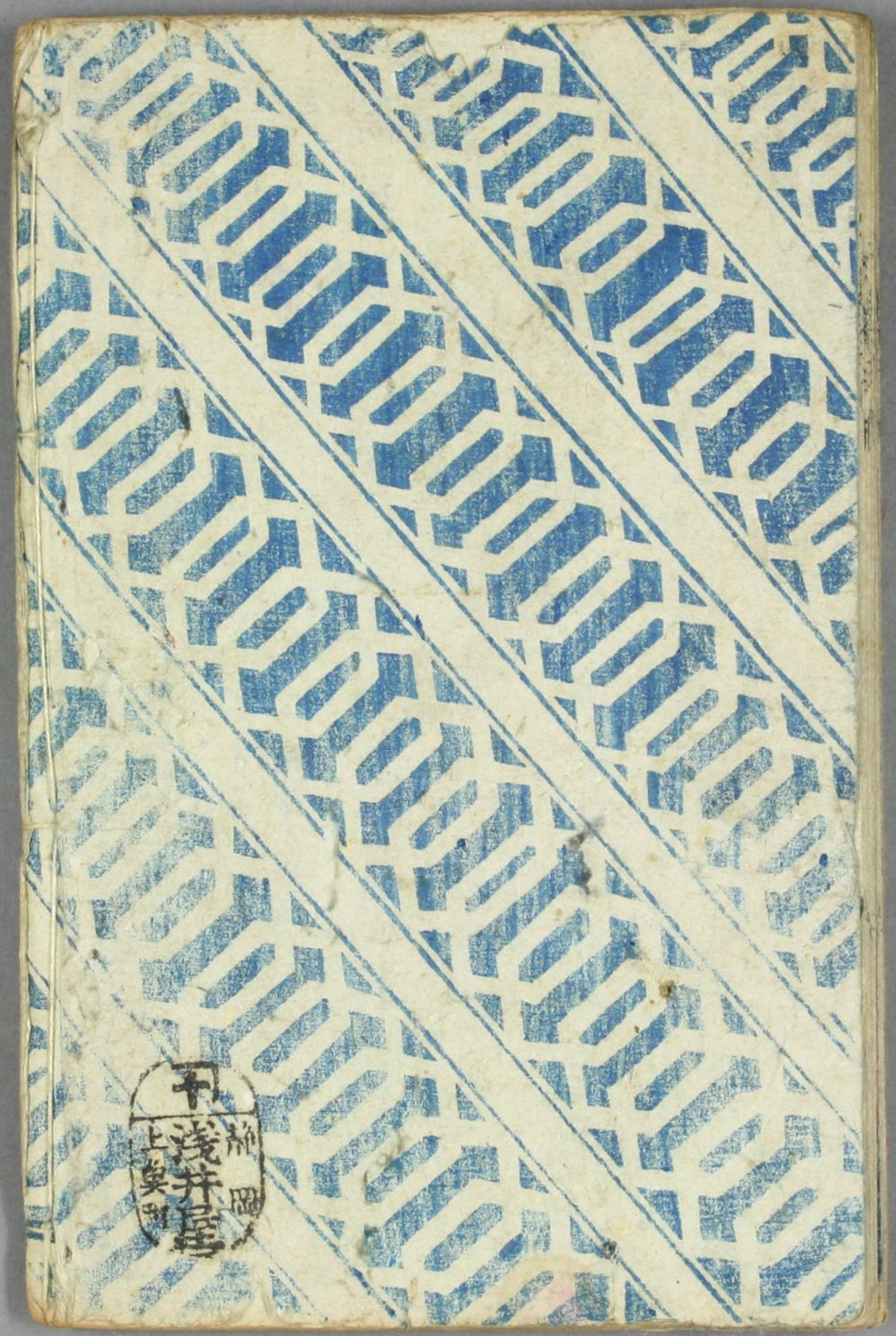
つゞき

世の有様を変ずる昔常り由
現在ふ生る己之助あきげんう

新

紀者ぐ
祝しく寄
しく寄
しく由
書つみて新
世人を郷土る
みをん

御届明治十三年二月廿三日
浅草瓦町十二番地
出板人 綱島亀吉


千
浅井屋
神田
上乗物